

# 中学校における自治的集団の育成を目指した学級づくり

## ーポジティブ行動支援（PBS）に着目してー

教育学研究科 教育実践創成専攻 教育実践開発コース 教師力育成分野 京島 健一

### 1. 問題と目的

#### 1.1 学級経営の重要性

これまで筆者は、自治的な集団の育成を目指して学級経営の実践について試行錯誤してきた。しかし、これまでの実践は十分なものとは言えず、また、自身の経験に頼った内容となっていた。先行研究でもこのような課題が指摘されている。赤坂(2019)では、学級経営は理論の体系化がされずに他者の成功体験に依存したり、自身の経験を重ねたりして行われてきたと述べている。このような状況があるにも関わらず、教育職員免許状に取得が必要な科目に学級経営という文言は書かれておらず、教員養成の段階で学級経営について十分な教育が行われていない可能性がある。それに加え、教員採用後も、教師が他の教師の学級経営の様子を継続的に観察する機会がないことや、筆者が勤務する山梨県においては、学級経営に関する研修が少ないという現状もある。

学習指導要領総則(2017)では、学習や生活の基盤として、学級経営の充実について明記されるようになった。これらのことは、学校教育、また、学級経営の重要性を示すことと同時に、学級経営を担当する教師に多くのことが求められていることを示している。また、河村(2010)にもあるように、日本においては教師に総合的な指導が求められている。機能体と共同体の2つの側面を持つ特有の構造を持っており、教師は教科指導、生活指導等、総合的に指導する必要性があると述べている。

加えて、生徒指導提要(2022)でも、個性の発見とよさや可能性の伸長および、社会的資質・能力を支える発達支持的生徒指導の在り方を

改善し、積極的な生徒指導の創意工夫を行う必要性が述べられている。

以上のように、多様化する子どもへの対応や生徒指導の在り方の改善等、学級担任に求められているものが増えている状況を鑑みると、学級経営のねらいや手立てを計画的に実施し、その成果や課題を分析していくことは重要である。

#### 1.2 本研究の目指す自治的集団

本研究では、学級経営において自治的集団の育成を目指した学級経営を行う。本研究が指す自治的な学級集団とは、河村(2014)にある、「自分たちで意思決定し、行動し、その評価を自ら行い、次の活動に繋げることができる集団」とする。学習指導要領特別活動編の学級活動の目標にあるように、「様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、資質・能力を育成することを目指す」ためには、学級経営を通じて、自治的集団を目指していくことが必要である。

表1 学級集団の状態

安定度	活性度
⑤安定	⑤創造
④固定	④活用
③流動	③遂行
②不安定	②停滞
①混沌	①不履行

このような集団になるために河村(2022)は、ルール共有と親和的な人間関係の確立度合

である「安定度」と個人の存在や考えが大切にされ、建設的に相互作用できる度合いである「活性度」が重要であるとした。学級集団の状態の安定度と活性度は、表1のように5段階で示される。

### 1.3 本研究の目的

本研究では、自治的集団の育成に寄与する学級経営の手立ての年間計画を考案・実施し、その成果と課題について検討することを目的とする。

### 1.4 ポジティブ行動支援(PBS)と関連する実践について

自治的な集団を目指した育成のためには、ただ、生徒に委ねるだけでは効果が得られにくい。しかし、教師主導で指示を出し、活動を実践させるだけでは、生徒の主体性を阻害してしまう可能性がある。そこで、学級を自治的な集団にしていくための手立てとして、生徒の活動の前後に着目し、その活動前の環境調整や、活動後の承認・称賛により、望ましい行動を増やしていくポジティブ行動支援(PBS)に着目した。

PBSとは本人のQOL向上や本人が価値あると考える成果に直結する行動である当事者のポジティブな行動を、罰的ではない肯定的、教育的、予防的な方法で支援するための枠組みである(日本ポジティブ行動支援ネットワーク, 2022)。本稿では、以下「ポジティブ行動支援」についてはPBSと表記する。なお、本研究では、学級の生徒全員を対象とした積極的な支援の実践に着目して研究を進めることとした。

PBSは米国で誕生して約30年になる。ゼロ・トレランスという問題対処的、処罰的、排除的指導により、格差が広がる社会を教育の力によって改善するためにPBSが急速に広がりを見せた。2018年には、PBSは、米国の25,000校以上で実施されている(OSEP, 2018)。PBSの考え方の基礎になっているのは、応用行動分析学である。行動は環境との相互作用であると考えられる。A(先行事象)やC(結果)を工夫することでB(行動)を強化することを基本と

している。PBSでは、学習や生活の基盤として位置づけられている学級の先行事象や結果を工夫していく人間尊重の精神を大切にする。また、不適切な行動や問題行動に対して、罰を与えるのではなく、適切な行動を分かりやすく丁寧に伝え、適切な行動ができたなら認める・ほめるなどの強化を行い、一連のABCで示されるような仕組みをつくる。ABC分析を整理すると下の図1のようになる。図1は栗原(2018)を参考に筆者が作成したものである。

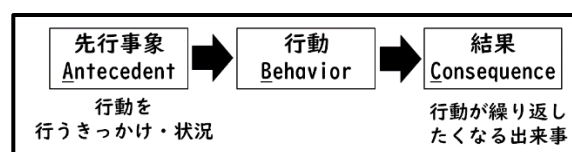


図1 行動のABC分析

ポジティブ心理学は、不都合な面を改善するという心理学のあり方を見直し、多くの人々がより幸福に生きることに貢献する心理学を目指すものである。松本(2019)はポジティブ心理学の考え方は間接的にPBSに影響を与えていると述べている。

PBSを取り入れた実践として、山田(2020)では、中学校における教師の言語称賛増加を目的とした研究授業の実施と、教職員から生徒に対するGBT (Good Behavior Ticket)を発行することにより、学校適応に一定の効果を及ぼすことが確認された。GBTとは、以下の図2のような感謝や称賛の気持ちを持った行動を観察した時、手渡されるカードである。図2は栗原(2018)から引用し、本研究で使用したものである。

また、阿部(2022)は小学校において、学校生活における肯定的な行動の自覚が、自他のよさを認め合い、自己存在感を味わうことができる集団づくりで有効であると報告している。

このような実践の他に、自治体レベルでの実践も広がっている。埼玉県戸田市教育委員会(2022)では、予防的な支援として、承認や称賛による望ましい行動の増加を狙った支援を指導の重点として明記している。また、徳島県東

みよし町(2018, 2020)では、学校規模ポジティブ行動支援(SWPBS)の実践も行い、学級づくりだけでなく、授業実践や保育の現場での必要性に関する資料を掲載している。本研究では、PBS の行動の捉え方を基にした支援と先行実践を複数組み合わせ、年間通した学級づくりの実践を行った。



図2 GBT (Good Behavior Ticket)

## 2. 方法

### 2.1 期間及び対象生徒

期間	令和4年4月から12月
対象	山梨県内公立中学校 3年生 1学級 31名 (男子17名, 女子14名) 筆者が学級担任

### 2.2 年間計画

学校の年間行事や、学級が想定される状況により、図3のように研究期間を第I期から第III期に分類した。

#### 第I期 (4月～7月)

学級のスタートの時期である。自身の活動を承認されることで自信を持って取り組むことができることや、教師と生徒の信頼関係を構築することをねらいとする。

#### 第II期 (7月～11月)

学校行事等で生徒同士の関わりが増加する時期である。振り返り活動を継続的に行うことで、他者に関心を持ちながら、肯定的な捉え方

を持つことをねらいとする。

#### 第III期 (11月～12月)

学級が集団としての質を高めていく時期である。第I・II期によってつけた力を学級集団課題解決のために全体で行っていき、自分事と捉え、活動していくことをねらいとする。

教師の働きかけ	学級の実態把握	ポジティブな作文		
	目指す姿の共有 GBT	Simpleプログラム		
生徒による問題解決			問題解決に向けた学級活動	
学級の状況	第I期	第II期	第III期	
	4月	7月	11月	12月

図3 年間計画

## 2.3 手立てについて

### 2.3.1 学級の実態把握

学級の実態把握は、以下の方法で行った。

#### a SCT (文章完成法)

4月に、「あなたにとってこのクラスとは○○である」という未完の文章を完成させる形式のアンケートを、帰りの会において5分程度で実施した。回答をユーザーローカルテキストマイニングツール(<https://textmining.userlocal.jp/>)を用いて分析した。

#### b 二者懇談

4月11日から15日に、学級全員を対象に二者懇談を実施した。学級に対する不安の有無とSCTにおける記述の理由について聞き取りを行った。

#### c 行動観察

4月中に生徒の行動観察を行い、安定度と活性化度を表1の学級集団の状態に沿って現状分析を行い、学級集団の状態に当てはめた。12月にも同様に行った。

### 2.3.2 目指す姿の共有

4月の学級活動において、学校教育目標に関わる望ましい行動を班ごとに検討し、ホワイト

ボードにまとめ共有した。また、授業、給食、掃除、集会・移動、話し合い、朝の会・帰りの会、その他と学級活動において想定される場면을挙げ、班ごとに望ましい行動を一覧にまとめたチャートを作成した。また、この際、武藤(2007)が述べるように、教師が一方向的に定めた条件が存在しないよう、生徒が考えるべき場面を想定し、班で意見を出しながら検討できる環境設定を心がけた。

### 2.3.3 GBT (Good Behavior Ticket)

第Ⅰ期にあたる4月から7月に実施した。

2.3.2 で生徒が考えた目指す行動を教師が観察できた際に、図2のGBTに具体的な行動と称賛・感謝の気持ちを書き込み、生徒に手渡した。その後承認・称賛された行動が強化されるか、行動観察を行った。GBTは月に1~2回生徒に手渡した。

### 2.3.4 ポジティブな作文

ポジティブ心理学を生かした実践として松尾(2022)では、帰りの会で一日を肯定的に振り返り、ポジティブな気持ちになる時間を創る実践を挙げている。これを参考に、「ポジティブな作文」と名付けた活動を行った。8月末から12月末まで毎日、帰りの会の3分間でGoogle Formsを使用して記入させた。

書かれた文章は2週間に1回程度、抜粋したスプレッドシートを見せながら、生徒に紹介した。実施1ヶ月後に、行動に対する見方や捉え方の変化、行動や心情に影響を与えているかいるかを問うアンケートを行った。

### 2.3.5 Simpleプログラム

自尊感情、ソーシャルスキルの育成を目的とした曾山(2019)のSimpleプログラムを実施した。学級スローガン「和」にちなみ、「和やかタイム」と名付け、10分間のプログラムを2度実施した。図4は2回のプログラムで使用した伝え方、聴き方のスキルの説明のスライドである。曾山(2019)を参考に筆者が作成した。実施後、活動が楽しめたかどうか、伝え方、聴き方

のスキルで意識できたかを問うアンケートを実施した。

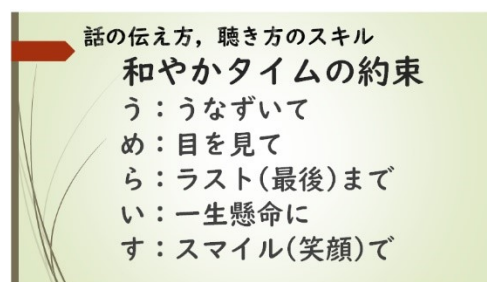


図4 Simpleプログラムで使用したスライド

### 2.3.6 課題解決に向けた学級活動

図3の第Ⅲ期に、課題解決に向けた学級活動を2回実施した。この活動は学級役員が主導して行った。授業活性化を目的とした活動を学級役員が「手挙げよう宣言」と名付け、図5の中学校学習指導要領解説特別活動編(2017)に例示された学級活動の学習過程のモデルに沿って実践した。

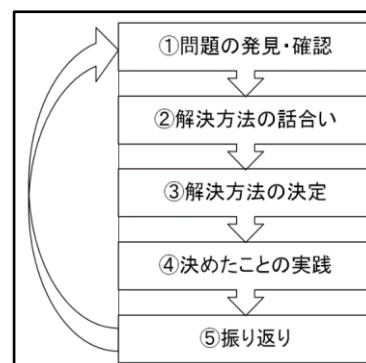


図5 学級活動の学習過程のモデル

中学校学習指導要領解説特別活動編より筆者が作成

取り組みは11月14日から18日の5日間実施し、「Ⅰ.手を挙げて発言した回数」、「Ⅱ.発言はできなかったが挙手した回数」、「Ⅲ.挙手はしなかったが発言した回数」をそれぞれ自己申告し、報告した回数を学級役員がグラフ化した。また、1日を振り返り、より良い授業を作るために更に伸ばしたい部分を毎日生徒がGoogle Formsに記入した。記入した内容は筆者がテキストマイニングで分析し、掲示した。取り組み終了後、生徒が主体的に行う学級活動

を、「自分事に捉える学級活動」と定め、その成果と課題についてアンケートを実施した。

### 3. 結果と考察

#### 3.1 学級の実態把握

テキストマイニングの結果は以下のとおりである。

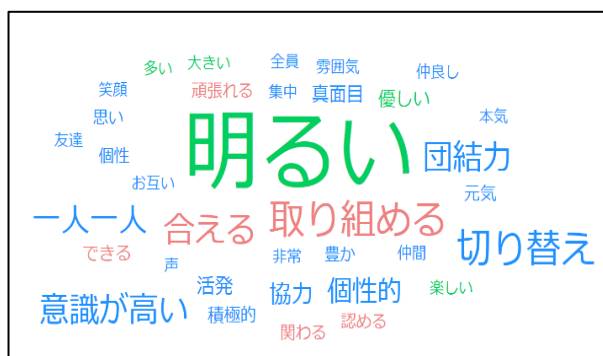


図6 4月実施アンケートの分析結果

このテキストマイニングでは重要度を表す値を「スコア」という。スコアは出現回数だけでなく、重要度を加味した値であり、スコアに応じた大きさで文字が示されている。中学校3年生ということもあり、これまでの人間関係や実践による影響が大きいと考えられるが、「明るい」のスコアが最も高く、「意識が高い」や「真面目」、「切り替え」等のスコアが高かった。また、二者懇談でも多くの生徒から、自分で時間を見て行動することができていることや班や全体の話し合いで協力している等、学級のスタートにおいて肯定的な事柄が多く話された。

表2 4月の行動観察から見られた行動

内在化されている行動
授業前に着席している。
教師の話を手を止めて聞く。
係活動で欠席者のフォローをする。
教師が提示した課題を提出する。
自分の考えをワークシートに書く。

内在化されていない行動
生徒の連絡に対して手を止めて聞く。
活動の改善を全体に提案する。
自分の考えを全体に発信する。

4月の行動観察の結果から、表2のように「内在化されている行動」と「内在化されていない行動」に分類した。「内在化されている行動」とは教師からの支援なしでも継続的に見られる行動である。「内在化されていない行動」とは、4月当初には教師支援なしでは行われない行動である。休み時間には、同じ部活動や昨年度以前の関わりをもとにした3、4人のグループが複数存在し、グループ同士の関わりが少ないことから4月末における学級の実態を表1の「安定度③：流動」、「活性度③：遂行」であるとした。問題行動が少なく、教師の話をしっかりと聞き指示されたことは実行でき、仲間同士の気遣いが見られる一方、自ら全体に発信や提案するような行動は見られなかった。

#### 3.2 目指す姿の共有

学級活動において「授業に積極的に取り組む、家庭学習をする、提出物を自発的にする」等、目指す姿を想定して考える様子が見られた。また、具体的な場面から目指す姿を考えることで、より具体的な行動として検討することができた。表3は生徒が、場面ごとに目指す行動をまとめたものである。この目指す行動を基に、教師による支援ができたことと共に、目指す姿を確認しながら、定期的な振り返り活動や、学級活動を考案することができた。

表3 生徒が考えた目指す具体的行動

場面	生徒の考える具体的行動
授業	<ul style="list-style-type: none"> <li>・準備をしておく</li> <li>・発言・反応をする</li> <li>・顔を向ける</li> <li>・全員が挙手できる</li> <li>・2分前に着席する</li> </ul>
給食	<ul style="list-style-type: none"> <li>・盛りつけた分は全部食べる</li> </ul>

給食	<ul style="list-style-type: none"> <li>・準備を協力する</li> <li>・完食を目指す</li> <li>・マナーを守る</li> <li>・平等になるように盛りつける</li> </ul>
掃除	<ul style="list-style-type: none"> <li>・無言ですみずみまで掃除する</li> <li>・時間内に終わらせる</li> <li>・全員で協力する</li> <li>・終わったら他の人を手伝う</li> </ul>
集会・移動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・静かに素早く移動する</li> <li>・並んだら黙想する</li> <li>・落ち着いた環境を作る</li> </ul>
話し合い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分から意見を出す</li> <li>・建設的な意見を出す</li> </ul>
朝の会 帰りの会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・机の上をきれいにする</li> <li>・話を聞く</li> <li>・切り替えを早くする</li> </ul>

### 3.3 GBT (Good Behavior Ticket)

31名の生徒に対し、1人あたり約5回、約150枚配布した。表3のような行動が見られた当日、または、翌日に感謝・称賛の言葉を添えながら手渡した。生徒達は“良いことをするともらえるもの”と認識しており、近くの生徒がもらっているとどんなことをしたのか気にかけている様子が見られた。また、うなずきながら人の話を聞くことや、給食準備を早く始めること、ひざをついて隅々まで拭き掃除をする等、GBTを渡した行動について、継続した姿が見られた。

### 3.4 ポジティブな作文

ポジティブな作文の記述内容は、自分、または学級全体の取り組みの様子や友達との協力や助け合い、日常の楽しさ等、多岐に渡っていた。生徒の記述内容を紹介する際は、個人の頑張り、他者の良さの発見、学級全体の成果等を紹介した。

アンケートの結果は以下の通りである。質問1「ポジティブな作文を書くことで自分や友達、クラスの見方や考え方に変化はありましたか。」については、変化した(25%)、少し変化した(39.3%)、あまり変化していない(28.6%)、変化

していない(7.1%)となった。質問2「変化した、少し変化したと答えた人は、どのような変化がありましたか。」に回答した内容は、「周りへの関心の高まり」、「他者のよい部分の発見」、「物事の捉え方の広がり」、「その他」と分類した。質問3「ポジティブな作文を書くことは、自分を前向きな気持ちにすることに繋がりましたか。」について、あてはまる(53.6%)、少しあてはまる(32.1%)、あまりあてはまらない(14.3%)となった。質問4「他の人のポジティブな面を知ることは自分やクラスと良い影響を与えることに繋がると感じますか。」について、そう思う(71.4%)、少しそう思う(21.4%)、あまりそう思わない(7.1%)となった。

アンケートの結果からも、日常的に肯定的な振り返り活動を行うことが、肯定的に捉えることや周囲への関心の高まりに繋がっていると考えられる。しかし、記述内容を紹介することが2週間に1度程度に留まり、他者の記述を知る機会が少なかった。互いの内容を共有し、学級の成果を共有する活動にまで発展させることで、より効果的な活動になると考えられる。そのためには、持続的かつ効果的なフィードバックの方法を検討する必要がある。

### 3.5 Simpleプログラム

2回のプログラムはいずれも10分間で実施をした。また、話の伝え方・聴き方のスキルについては、概ね意識しながら取り組んでいる様子が見られた。また、スキルについては実施中に一度中断し、意識して取り組んでいる生徒を挙げて、承認した後、再開したところ、スキルを実践する生徒が増えた。

表4 Simpleプログラム アンケート結果

項目	割合[%]
はじめや終わりのあいさつ	82.1
うなずいて聴く	78.6
話す人の顔を見て聴く	78.6
相手の話をしっかり聴こうという気持ちを持つ	92.9

アンケートの結果については以下の通りである。質問1「今日の活動は楽しかったですか。」についてはすごく楽しかった(85.7%)、まあ楽しかった(14.3%)となった。また、質問2「自分のあいさつや聴き方、うなずきはどうか。できていたと思うものを選びましょう。」については、表4のとおりである。

### 3.6 課題解決に向けた学級活動

「手挙げよう宣言」について、生徒が自己申告した結果を図7に示す。なお、生徒の提案により、11/15(火)は5時間、11/18(金)は4時間の授業であったため、回数は6時間で換算した。

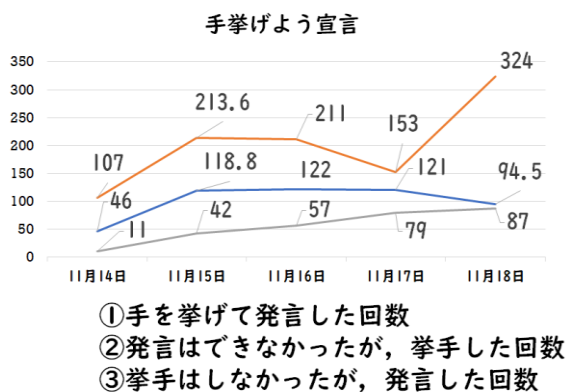


図7 手挙げよう宣言 結果

グラフのとおり、取り組み当初より回数の増加が見られた。また、11月16日に学級役員に取り組みの進捗状況を確認したところ、発言が増えたことにより、授業がスムーズに進んでいると答えていた。このことから、生徒が、発言の回数を増やす取り組みを通じて、授業の活性化というねらいに近づいている実感を持っていることも分かる。

「自分事として捉える学級活動」についての成果と課題について、アンケートに以下のような記述があった。成果として、課題発見・確認から解決方法の決定までの過程において、「やらされる活動ではなく、自分たちの意思で活動に取り組めたので、一人ひとりが意識を高く取り組むことができた。」等、生徒自ら行う実践に

よる肯定的な記述が多く見られた。また、実践における成果として「協力しようとする意識が高まった。一人ひとりが自分からやろうと頑張っていた」等、集団における意識の高まりや全体としての成果の実感についての記述が見られた。また、課題については、一人ひとりの意識の差と取り組み終了後の継続的な実践についての記述が多く見られた。「自分事として捉える学級活動」を目指したより良い方法を問う質問については、「リーダーだけでなく、全員で課題を発見する」という課題発見についての記述や、「週ごと班で目標を決めて活動していく」といった小集団を用いて実践を細分化し、継続的に実践していく内容の記述が見られた。

### 4. 全体考察：教師による支援に焦点を当てて

ここまでで、本研究で用いた手立てについて、結果を提示し、自治的集団の育成への効果を示した。以降では、特に教師による支援に焦点を当て、本研究の成果と課題及び今後の展望を述べる。

成果として、「行動の前後への働きかけ、望ましい行動を増加させる」というPBSの理念を基にした実践により、生徒の行動に対する教師の捉え方の変化が挙げられる。目指す姿として生徒が挙げた行動を承認・称賛する視点を持つことで、これまであたりまえだと考え、見落としていた行動も、生徒の頑張りによるものであると気づくことができた。また、望ましくない行動が見られた際も、叱責による指導ではなく、行動のきっかけと結果に着目し、目指す姿の再確認をしたり、望ましい行動が見られた時の承認等、これまでの指導方法から変化させることもできた。

また、学校行事や状況を見越した年間計画を考案し、実施したことによる成果も見られた。見通しを持つことにより、短期的な活動に終わることなく、継続的な実践を行うことができた。また、状況に応じて軌道修正を行うこともできた。

一方課題も見えてきた。生徒が主体的に活動を行うことの難しさである。本研究の目指す自治的集団の育成のためには、生徒にルールが内在化され、温かな雰囲気の中で、場面に応じてリーダー、フォロワーとしての力を発揮していく必要がある。生徒が様々な場面で力を発揮できるように、役割分担を細分化し、活動に関わる機会を増やすことや、学級の課題を自分事として捉え、協力しながら、評価、改善まで行うための支援を考えていく必要がある。そのためには、大きな取り組みや学校行事のみに焦点を当てるのではなく、日常生活の向上を持続可能で継続的な活動として行う必要がある。そのためには、教師の見通しを持った計画と細やかな支援が必要となる。

#### 文献

- 阿部真奈生(2022). 自他のよさを認め合い、自己肯定感を味わうことができる集団づくり—自分の役割における「すてきな行動」の自覚を通じて—. 福島県教育センター研究紀要. <https://center.fcs.ed.jp/wysiwyg/file/download/13/9848>. (最終閲覧日 2023年2月17日)
- 赤坂真二(2019). 学級経営の意味と課題. 日本学級経営学会誌. 1. 1-4.
- 河村茂雄(2022). 開かれた協働学びが加速する教室. 図書文化社
- 河村茂雄(2014). 学級リーダー育成のゼロ段階. 図書文化社
- 河村茂雄(2010). 日本の学級集団と学級経営. 図書文化社
- 栗原慎二(2018). PBIS 実践マニュアル&実践集. ほんの森出版
- 日本ポジティブ支援ネットワーク(2022). <https://PBSJapan.com/about-aPBS-j/> (最終閲覧日 2023年2月14日)
- 松尾直博(2022). ポジティブ心理学を生かした中学校学級経営. 明治図書
- 松本一郎(2019). 「P B I S (倉敷モデル) で笑顔あふれる学校に」 <https://www.kurashiki-oky.ed.jp/nishi-j/documents/2pbiskurasmailschool.pdf> (最終閲覧日 2023年2月20日)
- 文部科学省(2022). 生徒指導提要
- 文部科学省 (2017), 中学校学習指導要領解説 特別活動編.
- 文部科学省 (2017), 中学校学習指導要領解説 総則編.
- 武藤崇 (2007), 特別支援教育から普通教育へ—行動分析学による寄与の拡大を目指して—. 行動分析学研究. 21. 1. 7-23.
- OSEP Technical Assistance Center on Positive Behavioral Interventions and Supports (2018). Brief introduction and frequently asked questions about PBIS. Retrieved from <https://www.pbis.org/resource/pbis-a-brief-introduction-and-faq>. (最終閲覧日 2023年2月14日)
- 埼玉県戸田市教育委員会(2022). 指導の重点・主な施策. [https://www.city.toda.saitama.jp/uploaded/life/98471\\_194817\\_misc.pdf](https://www.city.toda.saitama.jp/uploaded/life/98471_194817_misc.pdf)(最終閲覧日 2023年2月20日)
- 曾山和彦(2019). 誰でもできる！中1ギャップ解消法. 教育開発研究所.
- 徳島県東みよし町(2018). <https://manabinohiroba.tokushima-ec.ed.jp/wysiwyg/file/download/20/320> (最終閲覧日 2023年2月14日)
- 徳島県東みよし町(2020). <https://manabinohiroba.tokushima-ec.ed.jp/wysiwyg/file/download/20/315> (最終閲覧日 2023年2月14日)
- 山田賢治・松山康成(2020). 学校規模ポジティブ行動支援(SWPBS)が中学校の学校適応に及ぼす効果の検討. 日本教育心理学会第62回総会発表論文集. 323.